

第 27 回 研究大会 報告

シンポジウム

「多種目のコーチングと比較し、バレーボールの発展を考える」

＜ 講演① 市村 志朗 氏

(日本ハンドボール学会理事長, 東京理科大学) ＞

今回はハンドボールでの東京オリンピックまでの取り組みとその後についてお話しさせていただきます。

ハンドボールはバレーボール専門の方にとって馴染みがないと思うので、簡単にご紹介します。

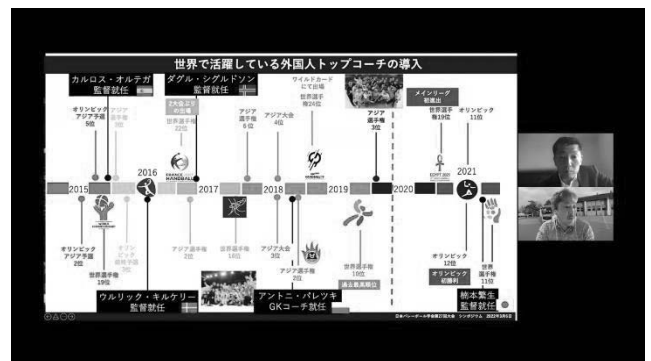
ハンドボールの一連の流れについてご説明いたします。ハンドボールはゴール型の球技です。そして、組織的な攻撃があって、戻りの局面、組織的な守備があって、守備が終わると速攻、組織的な攻撃へというモーメントをループするのがハンドボールの一般的な流れです。ハンドボールの特徴として、かなりハードな正面からの身体接触が許されていることが挙げられます。守備の時に正面から選手をホールドして、ファールをして攻撃を中断させてゲームを作っていくということが特徴です。試合中にファールをしるという指示がベンチからあり、他の競技からは考えられないことがあるのです。

今回は、リオ五輪予選終了後からの全体の強化の取り組みについての大きな概要と、情報科学委員会での、どのようにオリンピックのサポートをしてきたかについてのお話をします。

全体の強化の取り組みは大きく分けて三つあります。1つ目に、世界（欧州）のハンドボールの導入であり、世界で活躍している外国人のトップコーチの導入をすること。2つ目は、国際試合の経験数を増加するという事です。年間スケジュールの国際スケジュール化に取り組みしました。3つ目は、フィジカルの強化です。先ほど動画で見ただいた通り、かなりコンタクトのあるスポーツです。そのコンタクトに耐えるためのフィジカルレベルの獲得と、パフォーマンス発揮のためのコンディショニングも重要だということです。

1つ目の外国人コーチの導入についてです。リオの予選終了直後に、男子に外国人コーチとしてカルロス・オルテガ氏を招聘しました。実は、その前に 1999 年の日本での世界選手権の時に、男子はオレ・オルソン監督というスウェーデンの監督を招聘して成功体験を経ています。しかし、それ以来外国人コーチを招聘していなかったということで、ここでカルロス監督を招聘しました。彼は、現在世界で一番強いチームの監督をしています。同時期に女子は、ウル

リック・キルケリー監督を招聘しました。彼は過去サウジアラビアで男子の監督をし、女子の監督経験もあるなど多彩な経験がある監督です。現在は、デンマークのオーデンセというチャンピオンズリーグにも出るようなチームのヘッドコーチをしております。現在男子はダグル・シグルドソン監督です。リオ五輪の際にドイツ代表で銅メダルを取り、世界最高監督に選ばれました。また、ハンドボールで特徴的なのはゴールキーパーで、ゴールキーパーコーチが必要になります。そこで、ポーランドからアントニ・パレツキコーチを招聘しました。欧州のハンドボールの導入と練習拠点の確保、選手の欧州への移籍の推進ということで外国人コーチに来ていただきました。監督やスタッフについて年表にしてみました。上が男子、下が女子です。女子は、2015 年から東京五輪までウルリック監督。男子は、カルロス監督が 2015 年末に就任し、2017 年にはダグル・シグルドソン監督に交代しました。ダグル監督はパリ五輪までの契約で進んでいます。実際に、外国人監督の結果はどうだったのかということを見ていきたいと思えます。これはアジアでの成績です。アジアでは男子は良いときで 3 位。悪いときで 9 位。アジアで 3 位以上になると出場できる世界選手権は出られない時期もありましたが、外国人監督を招聘してからは世界選手権にも出られて、アジアでもある程度安定したパフォーマンスを発揮できるようになりました。女子は、アジアでは 3 位以上でしたが韓国に勝てずにいました。世界選手権でも予選突破はできては下位でした。招聘後は熊本の世界選手権で 10 位、オリンピックは最下位でありましたが、その後の 2021 年世界選手権で 11 位と成績は上がってきています。



国際経験についてですが、男女とも東京オリンピックを目指して 2017 年から 2020 年までにトータル 100 試合以上の国際経験を積むことを目標に、年間スケジュールを組み、

ヨーロッパへの遠征などの予定を組んでいました。女子では国内での国際大会を頻繁に行うこと。男子ではダグル・シグルドソン監督の関係でアイスランドの代表Bチームの選手等をゲストチームと呼んで、ナショナルトレーニングセンターでの通常合宿でも外国人選手と練習ができる状況を作りました。国際経験を数多く積みながら、体力・スキル・メンタルを高めようということをキーワードにしてこのようなことを行っていました。結果として、徐々に国際経験を増やしていくことができました。特に女子に関しては、2017年には16回しかなかった国際経験を2019年には63試合に積み重ねて増やして来ました。しかし、2020年から新型コロナウイルスの影響で、国際試合の数は増やすことができませんでした。目標の100は順調に進めば達成できていたのかなと思います。2019年の熊本世界選手権終了時、1人の選手の平均的な国際大会の出場回数が2017年女子代表チームは9.4回だったのに対し、46.2回まで増やすことができていて、強豪国・ヨーロッパの国の人たちにだんだん追いついてきています。やっとなり地理的に不利なところにある日本が国際大会の経験を積むことができるようになってきて、それは大事なのだということが分かります。

フィジカルの強化についてです。ハードなコンタクトに耐えうるフィジカルレベルの獲得ということで、ハンドボール女子でのフィジカルコンタクトの実際の強さを見ていきます。大きな選手と小さな選手がコンタクトします。日常的にこのくらいのコンタクトが行われています。身長が高い方が有利なので、高い身長の選手を選ぶようにしており、年齢は平均28歳くらいの人選ばれています。2018年から2019年で、体重が3キロ程度増え、除脂肪体重も増えているので、しっかりと筋量が増えて筋力も持久力も改善していき、徐々に世界で戦えるフィジカルに近づいているということが分かりました。

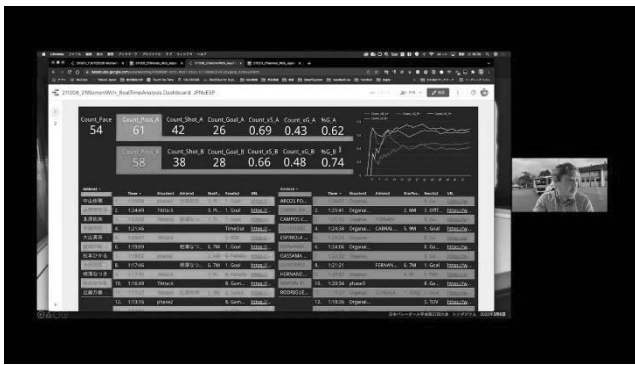
情報科学委員会での取り組みでは、大きく分けて4つのことがありました。1つ目は、XPSサイドラインの運用ということで、ソフトウェアのお話です。2つ目は、ウェアラブル心拍加速センサを用いた強度負荷の管理と運用。3つ目は、試合分析と映像のリアルタイム共有・フィードバック。4つ目に、新型コロナ感染症対策です。

まず、サイドラインの運用ということで、これはよくあるゲーム分析ソフト、情報共有ソフトウェアです。ダグル・シグルドソンが監督になられた時に、実際に本格運用が始まりました。アイスランドで作られているソフトウェアで、ダグル・シグルドソン監督がアイスランド出身だということもあって導入しております。このソフトウェアでは、スケジュール管理、練習時間・内容・強度の管理、練習ドリル、様々なファイル・映像、ゲーム分析、プレゼンテーション等が一つのソフトウェアで行えます。実際にこれがカレンダーで、その日の練習のトレーニングが時系列で出てきます。また、どんな練習をしたのかも事前に準備した動

画で見ることができます。このような情報はハンドボールの強化、日本リーグのチーム・監督に公開しているので、代表チームがどのような練習をしているのかを関係者全員がすぐに確認できます。実際にどのようなトレーニングをどのくらいしているかについて、練習の参加・欠席の記録、トレーニングの内容も見ることができます。トレーニングについては、赤色がアスレチック・フィジカルトレーニング、青色がオフエンストレーニング・緑色がディフェンストレーニング、黄色がゲームトレーニングで全体のトレーニングとの割合を見ることができます。ダグル監督はできるだけアスレチック・フィジカルトレーニングと、ボールトレーニングが半々になることを目指しており、フィジカルもかなり重視している監督であります。こちらがその時系列の変化です。ここでは2020年11月から東京オリンピックまで、トレーニングの割合がどのように変化しているかを見ることができ、代表チームがどのような練習をしているかが一目でわかります。こちらは、いろいろな映像や書類を共有している図になります。実際にトレーニングセンターで行っている練習やゲームは、ここに格納されてすぐ見ることができるようになっていました。また、対戦相手の情報について、選手名やポジション、選手の特徴をアニメーションで表しながらアナリストが作っています。また、ゲーム分析もこのソフトウェアでやっています。これはバレーボール同様、いつでも誰が何をしたかについてタグを打ちます。最近ではゲーム終了直後にデータを共有することができるようになっており、QRコードをスマホやタブレットで読み込めば表示することができます。情報はダッシュボードで作られており、東京オリンピックのデータだけを見ることができ、またその中の攻撃の種類や評価を見ることができます。URLを共有されているので、監督やコーチがすぐにデータを確認することができます。

次に、ウェアラブル心拍計についてです。これはどの競技団体でもやられていると思いますが、現在はPolarのH10センサを使って管理をしています。この写真はウルリック監督が強度について話しているところです。実際にゲーム中に計測して管理をしています。トレーニング中も必ずモニターに表示をし、オリンピック時もベンチにおいて見ることができるようにしていました。私たちが最近管理しているのはウォーミングアップの心拍数を挙げることで、心拍数を1度はマックスの90%以上に上げるように促しています。また、最近注目しているのは、ハーフタイムの心拍数です。ハーフタイムで心拍数が落ちて、そのあと後半が始まった時にいつもと同じ心拍数でいなければなりません。上がっていく過程をできるだけ短い時間にしたいということです。後半が始まったところで連続失点を起こしがちなので、失点をなくす一つの要因として注目しています。また、H10センサには加速度計が内蔵されているので、アンドロイドのソフトウェアで取り出し、練習中の加速度を見て、その日の練習の状況・活動評価を知って、コンディ

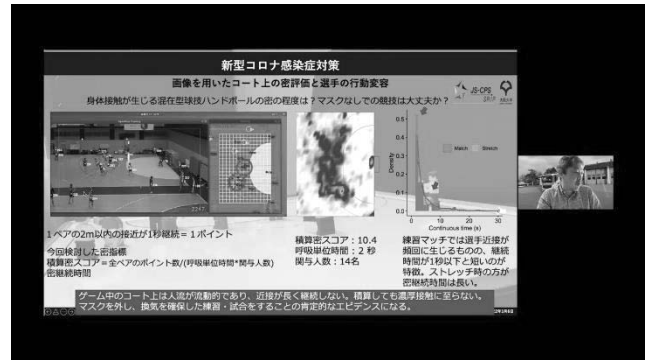
ショニングに役立てています。実際にオリンピック直前の練習では、結果をホワイトボードに張り出して選手に報告していました。グラフの形として、2こぶはハンドボールの一般的な形。キーパーは左に山がある形で、強度は高いものの頻度は少なく、高い加速で瞬発的に動いていることが分かります。右の高いこぶは高負荷を示します。その選手たちは練習の負荷が高かったということなので、練習後のケアを十分に行うように指示を出していました。データのリアルタイムの共有についても、どこの競技団体もやっていたと思いますが、ハンドボールでは各日本リーグのアナリストを呼んで大会期間中にアナリストチームを作りました。代表チームのアナリストと一緒に仕事をしながら、トレーニングセンターの横で集まって色々な分析をして、チームにフィードバックをしていました。試合中には1人がリアルタイムでタグを打ち、現場とそれ以外のアナリストでチームを作って活動していました。また、毎日PCR検査も欠かさず行っていました。2021年に女子代表チームはスペインで世界選手権がありました。コロナウイルスの影響でアナリスト全員がスペインに行くことができなかったので、日本の自宅ですべて分析をして、リアルタイムでスペインにデータを送っていました。ハンドボールの世界選手権はYouTubeで配信されていたので、試合を見てグーグルのスプレッドシートで分析をして、グーグルデータポータルに乗せ換えて現場で共有するというのをやっておりました。データだけではなくて、例えば日本のゴールシーンだけを選ぶこともでき、そのURLを選べばそのシーンをYouTubeで見ることができます。



世界選手権のベスト8と今の日本の違いについてのデータです。6人攻撃の失点割合について、6人で守備しているときの失点する割合がベスト8チームは0.3ですが日本は0.41という数値になっています。この差がベスト8に入れるか入れないかの差になると考えています。その差が現れているのがこのプレーシーンだろうと日本監督の楠本さんと話していました。女子日本代表監督の楠本さんとも話していたのですが、レフェリングの傾向が後ろから相手選手を掴むと2分間退場になるということで、体格が小さな

日本はかぶったりもぐりこんだりするなどの新たな対応を徹底強化していく必要があるということです。

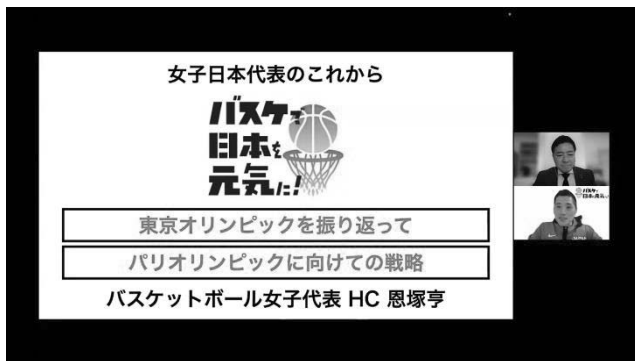
最後に、コロナ対策として、ハンドボールは大丈夫かということがあります。人が密集しているところを図って、データとして表してみました。すると、ゲームしているときは特に問題がないだろうという結果に至りました。



< 講演② 恩塚 亨氏

(全日本女子バスケットボール代表監督, 東京医療保健大学) >

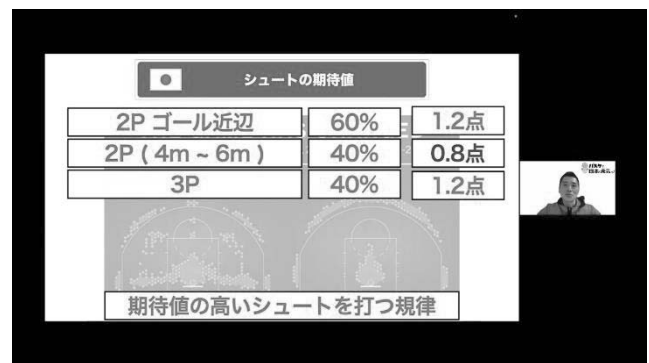
まずは東京オリンピックを振り返って、メダル獲得に繋がったと私が感じる最も大きなポイントは、マインドセットとデータバスケです。私たちは東京オリンピックで初めてメダルを獲得することができました。私はその時アシスタントコーチとして現場に携わらせていただいたのですが、目の前にいて何が1番の大きな要因だったのかということ振り返りました。これまでの日本はできない理由に目を向けていました。小さいから、体が弱いからもっと頑張らないといけないというような義務感をエネルギーにする感じがしました。なので、クリエイティブというよりも重荷を背負って戦っている、そんな感じでした。東京オリンピックは、今までの自分を払拭して自分たちを差し引くことなく心からメダルを取りたいという理想に自分たちが引っ張られて、内側から突き動かされるようなエネルギーで活動できたことが一番大きかったのではないかと思います。私も5連覇をかけたアジアカップに挑戦しました。私たちはオリンピックの学びから、絶対に自分たちを差し引かない、になりたい自分になるんだ、というところを見据えて、そのためにできることをやろうというポジティブなエネルギーで行こうと向かった結果、ものすごいエネルギーで中国を圧倒して不利な状況から挽回してチャンピオンになることができた、と思っています。ただ私たちは自分たちを差し引かずにやりたい自分になろうというオリンピックの学びを活かしたことで、この結果にもつながったと考えていますし、このように今続いているということです。



今から、赤いものは何個かぜひ数えてください。何個あったでしょうか。これは実際にアジアカップの前に代表選手にもやったのですが、大体皆さん答えられると思います。赤は7個と。でも、青いものは何個かという風に聞かれたときに、選手は大体答えられない。もっと言うと、合計何色ありましたかという風に聞くと、おそらく素で答えられる人は、私はお会いしたことがありませんし、選手にもいませんでした。これをなぜ大事かと考えるかという、脳科学的話になりますが、脳は1秒間に5感を使って入る情報を2000個キャッチしています。でも実際に自覚できるのは8個くらいです。しかし、確かにそこには他の色も存在していましたよね。ではなぜ赤だけを認識したかという、脳は必要とすること以外は省略するからです。このような脳科学の学びから、先ほどの自分たちを差し引かず、挑戦することの重要さがあったのではないかと考えています。できると思っていたらできるというお話はどの世界でもあると思いますが、私たちはこのことを本当に心から信じています。できると思っていたらできる理由が目に入ってくる。いろいろなハイテクなことや戦術を駆使したとしても、私はだめだといった差し引いた自分で見ている景色と、私はこうなりたいと理想を掲げてワクワクしながら見える景色は違うと思います。このマインドを私たちが大切にできたことが結果につながっていると思いますし、これからの代表活動の中でもこの考え方を大事にしていきたいと思っています。この辺りが1番大きなポイントです。

次に、データの活用についてご紹介したいと思います。この図は、アメリカのプロバスケットボールNBAのシュートのデータになります。このデータは1シーズンに試合中シュートをどこから打ったかを記録したものになります。左のものが約20年前のデータで、右のものが最近のデータです。近年のシュートは、3Pとゴール近辺でのシュートがトップ200に入っています。ここを紐解いて戦うことが戦略的に戦う鍵ではないかと私たちは考えました。それにはシュートの期待値が関係しています。ゴール近辺のシュートは大体60%の期待が記録されることが多くあります。この60%を期待値で考えると、 2×0.6 で1本シュートを打てば1.2点入ることが期待できるだろう、ゴール近辺と3Pラインの間にあるシュートエリア、ここは大体プロの選手

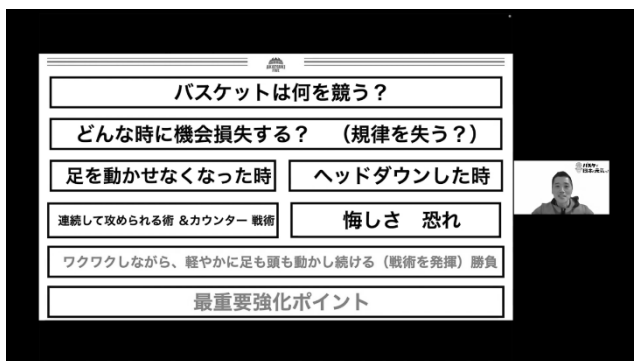
でも40%くらいです。これは期待値を見てみると0.8点になります。3pは大体40%です。これを期待値で見ると1.2点です。私たちはすべての試合や練習から、期待値の高いシュートを打つ規律をチームに落とし込むことを強く意識してトレーニングしていました。この結果、メダルがかかったオリンピックの準決勝フランス戦でその成果が数字として表れたと感じています。左側が日本で、右側がフランスのシュートを打ったエリアになります。日本は2pシュート、4m~6mのシュートは3本程度しか打っていないことが分かります。一方フランスは、期待値の低いシュートを11本も打っています。こういったところをコントロールして戦っていくことで、勝つ確率を高めていける、そういう規律を選手に遂行できるようにコーチングしていったことも、大きなポイントだったと考えています。



ここからは、パリオリンピックに向けての戦略ということでお話をさせていただきたいと思います。私はヘッドコーチのミッションを選手とチームの命を輝かせること、価値を高めること、と位置付けています。目標はパリオリンピックで金メダルを取ることです。そのために最重要戦略は何か。理想の自分から引張られて素晴らしい未来に繋がる景色を見られるようにすることです。そうすれば、選手が最高の力を発揮することができます。もう少し具体的に言うと、高いアジリティで強みを発揮し続ける、高い敏捷性で強みを発揮し続ける、機会損失しない、いろいろな戦術がバスケットには存在するのですが、その戦術の前に自己肯定感が高いことや、気持ちが前向きであれば簡単に攻められるチャンスがバスケットには至るところに転がっているということです。でもそれが、セルフイメージが下がっていることで、このチャンスをチャンスだと思えない、そういう時にコーチが攻めろ！などと言ってしまうと、余計にこじらせてパフォーマンスが下がってしまうということが、私が今まで見てきた中でパフォーマンスの鍵かなという風に考えています。

そこで、バスケットはそもそも何を競うのかということを考えています。私はどんな時に最高のパフォーマンスになるか、ということが鍵だと思うのですが、逆にどうすれば最高のパフォーマンスが出せないかという視点で、どんな時に機会損失をしてしまうのかを解決することが最高の

パフォーマンスになる鍵だと考えます。バスケットでいうと、足を動かさなくなった時とヘッドダウンしてしまう時、先ほどの赤を表す心の状態です。足を動かさなくなる時がどんな時かという、相手にプレッシャーを受けたり、自分が意図していない動きを相手にされたりした時に思わず足が止まってしまう、なので連続して攻め続けられる術である、カウンター戦術を磨くことが足を動かし続けられる鍵だと考えます。マインドの方は、自分のパフォーマンスを下げる要因を排除することが鍵だと思います。私はコーチをしていて、選手がワクワクしながら、足も頭も軽やかに動かし続けられる、そういう戦い方で競う勝負だという風に意味付けをして、これを最重要強化ポイントだという風に考えています。

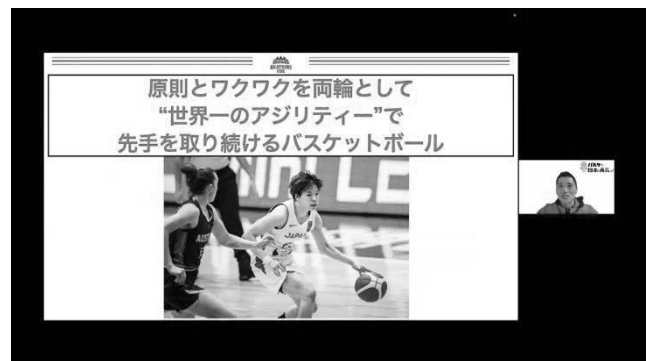


そのために私は世界一のアジリティというキーワードを上げています。アジリティとは何かというと、バスケットボールは常に状況が変わります。コーチがいちいち指示を出していたら間に合いません。なので、その状況変化の中で素早く良い選択をする能力を磨いていくことがパフォーマンスアップの鍵だと思います。選択というところがポイントで、走る速さではなく心の切り替えの早さも含まれます。次から次へと現れる障害に対して適切にかつ瞬時に対応し続けていく速さをアジリティだと考えます。プラスして、パフォーマンスを下げているところもポイントです。私たちはF1レーサーのようにものすごい出力で動くことはできないと思うのですが、ラリーカーのようにあらゆる条件に適応しながら軽やかに進み続けていくことを目指していけばいいのではと考えています。



世界一のアジリティをどうやって遂行していくかということで、原則の遂行とワクワクのマインドセットが鍵だと考えています。これをもう少し紐解くと、こういう時はこうっていう最適から設定することと、なりたい自分になるという設定です。原則とは、私は最適解という風に考えています。最適解を設定して置くことで何が良いかというと、自由にプレーしろと言われても困ると思いますが、こういったことを解決するためにすごく良いツールだと思います。例えばジャンケンをする時にある状況をチョキとします。チョキの状況を見た時に、チョキの状況だからどうしようと考えていると時間がかかります。なのでチョキの時にはグーと決めておく、それが最適解です。そのイメージを持っておくことで、あのグーを出すよな、ということも周りもみてチームとしてシンクロしていくことができます。しかし、チョキの時にはグーが最適解ですが、もしかしたらグーに対してパーを出してくるかもしれません。それも流れとして読んでいて、グーを出しながら相手がパーを出してくるかもしれないから半分チョキを出しているような状況を作れたら、すぐグーを出せるという規律とグーを出しながらチョキも出せる即興、両方両立できるのではと考えています。

こういうことで、大きな推進力と柔軟性を発揮できるのではと考えて、私はこれから強化していきたいと考えています。私たちのバスケットは、原則のワクワクを両輪として世界一のアジリティで先手を取り続けるバスケットボールを目指して高さを凌駕していきたいと考えております。



< 講演③ 矢島 久徳 氏

(日本バレーボール協会 ハイパフォーマンス事業本部長) >

まずは、2028年ロサンゼルスオリンピックまでのロードマップとして、各大会があります、というスライドになっております。直近の世界選手権では、男子はベスト8、女子はベスト4以上を目指しています。2023年にはパリオリンピックの出場権をかけた世界最終予選を開催予定です。パリでは男女ともベスト4以上を努力目標としています。2026年の世界選手権ではメダル獲得、その先のロサンゼルス

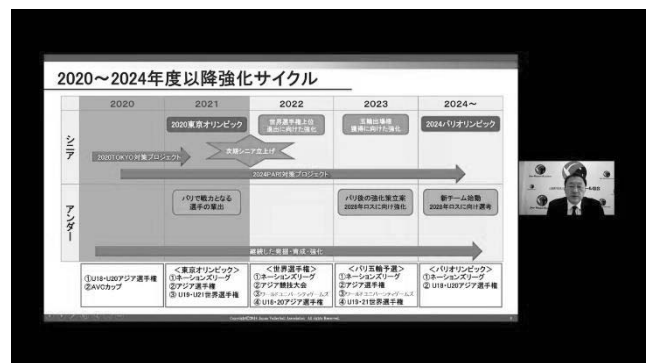
スオリンピックにかけてメダル獲得という努力目標を立てております。

必達目標として、パリオリンピックの出場権を絶対に獲得するということが男女共通になっております。1つ目に、東京オリンピックの経験を活かすことです。私も東京でオリンピックの試合を生で見たのですが、他の世界大会とは違い、エネルギーのかけ方がオリンピックならではの、特別なものなのだと感じました。男女とも東京オリンピックを経験しているの、それを活かしてパリの出場権を獲得するということです。2つ目に、ワールドランキングの向上です。国際大会の1試合に対する比重が重くなりました。1試合でランキングが上振れ・下振れするので、目の前の試合に対して十分に準備をして戦う必要があります。男女ともワールドランキングの向上ということで、現在男子は11位、女子は9位ですが、最低でもこのラインをキープして、いかに上にひとつずつ上がっていくかということです。3つ目に、全てのメンバーの戦力強化ということですが、例えば2023年の五輪予選では、おそらく9日で7試合というタフな大会になるのではないかとということです。コートに出ている6人では乗り切れません。予選では14名ベンチに入れるので、その全てのメンバーが同等の戦力になるように強化をしていかなければならないということです。4つ目として、有望選手の早期戦力化。Vリーグをやっていますが、その中から伸びてきた選手、将来的・ポテンシャルのある選手をいかにピックアップして、それを代表のところで戦力化できるかということが男女とも大事になってくるのではないかとということです。5つ目として、所属チーム、関係各所との円滑なコミュニケーションをとっていくことです。色々なところで協力していかなければならないので、そういうところを男女ともしっかり行って、オールジャパンで必達目標を目指していきます。あとはパリオリンピックの上位進出を果たすということを戦略としたいと考えております。

次に、具体的な国際大会のスケジュールを皆さんに共有したいと思います。2024年のパリオリンピックを目指して、2022年には、世界選手権、アジアカップやアジア大会などがあり、アンダーエイジの大会ももちろんあります。このような大会が目白押しに、そして5月の中旬から10月の中旬までという国際大会期間の中で、大きな大会が短期間にあります。そこでランキングをキープ・向上していくためにどのような戦い方をしていくかが課題になってきます。2023年にはオリンピック予選があります。ほぼ具体的なスケジュールが男女とも決まっています。皆さん疑問に思っておられるかと思いますが、ワールドカップはオリンピック予選に代わって開催され、24チームが8チームの3ブロックに分かれて、各ブロック上位2チームが決勝進出というのが出場国決定の現状でございます。そこでオリンピックの出場を決めた6チームと開催地の1チーム以外の残りの5チームの決め方ですが、おそらくネーションズリーグ

での出場国以外の上位チームがオリンピックに出ていくと考えられます。なおかつ、各大陸の上位です。例を出すと、日本とイランが出場権を獲得できなかった場合に、ランキングで日本が上なら日本がオリンピックに行けて、イランが上なら日本は出場できないということです。ですので、まずは世界予選でオリンピックの切符を手にすること。ただし、そこで逃した場合にも、最後のチャンスがあるということです。

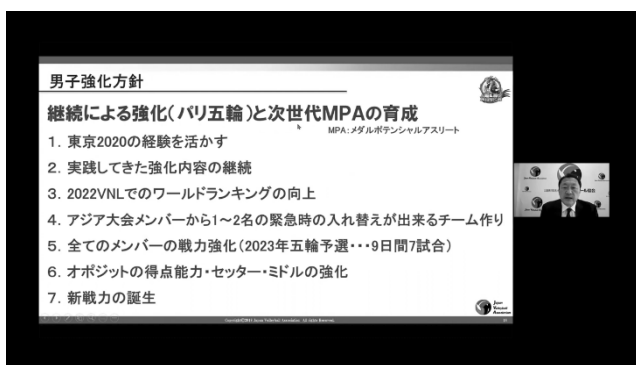
これが2022年のスケジュールです。男女とも5月末から6月、7月にかけてネーションズリーグが3か国（男子：ブラジル・フィリピン・大坂、女子：アメリカ・フィリピン・カナダ）で行われます。2024年度強化サイクルということで、シニアとアンダー、両方同時並行で強化をしていきます。パリに向けて、3年しかオリンピックまで準備期間がないので、1年のうちにホップ・ステップの段階に行ける準備をしていくということです。23年はオリンピックの予選がありますので、始まった時点からステップ、そして9月10月の予選に向けてジャンプということで完成形にて臨めるようにしていくということです。24年はパリオリンピックに出場するという大前提で、心技体知の集大成ということでハイジャンプをするということでございます。私は、いろいろなところでもお話しさせていただいておりますが、一般的によく言われる心技体ではなく、心技体知まで申し上げております。知というのは知識や考えること、データなど、バレーボールの知識を増やすという意味でお話しさせていただいております。



現状日本男子は11位、イランは10位と常に競り合っている状況でございます。いかに今年からイランの上に行くかということだと思います。中国も大型化していて、アジア選手権でも敗れている状況の中で、若い選手も多いので驚異的なチームになるのではないかと考えております。韓国は33位と若干低迷している状況かなと思います。男子のランキングの推移であります、少しずつ上がりながら、東京オリンピック終了時点で10位、アジア選手権でイランに敗れ現状11位でございます。これを2024年までにいかに上げていくかが課題になってきます。

これはレーダーチャートで、2017年のワールドグランドチャンピオンズカップのデータでございます。日本はまだ小さい円で、比較対象として黒色で示すイランを見ていただきたいです。当時はイランに歯が立たない状況でありました。日本は28年ぶりにワールドカップで4位入賞を果たしました。イランには勝っていました。世界選手権では、予選グループで敗退して残念な大会となりました。オリンピックのPOOL Aのデータになります。6チームのグループ戦で、イランは茶色。日本はイランに対等以上で戦えるようになってきたということがこの図からもわかります。日本の課題はブロックであり、がたんとはこんでいきます。ブラン監督も今後強化をしていくにあたって大きなポイントになってくるのではないかと考えています。ワールドカップでもブロックのへこみは非常にひどかったです。

これが男子の強化方針ということで、先ほどと被るところもありますが、継続による強化と次世代メダルポテンシャルアスリートの育成をしていくという方針で男子は進めてまいります。1つ目に、東京2020の経験を活かすことです。2つ目に、実践してきた強化内容の継続。これは中垣内体制の時のコーチであるフィリップ・ブラン氏が監督になるので、強化してきたことの継続をしていくということです。3つ目に、今年度(2022年)に関してワールドランキングの向上をしていくということです。4つ目に、2022年度はアジア大会や世界選手権もあります。両大会で2チーム作るの、選手の入替えをできるようなチームの力の底上げをしていくことです。5つ目に、男女の共通のところになりますが、全てのメンバーの戦力強化というところです。6つ目に、ブラン監督が強く言っていたことですが、オポジットのさらなる得点能力の向上と、セッター・ミドルの強化であり、大きな課題としています。7つ目に、新戦力の誕生ということで、大学、Vリーグで男女とも新しく成長している選手を早めに戦力化していくということです。以上のことを男子の強化方針にしております。また、PDCAをまわして日時管理を男女ともしていくことを昨日もお話をしました。



あとは、基本的な考え方のところ、恩塚監督もおっしゃっていましたが、バレーについても、ハードワーク、ヘ

ッドワーク、チームワークというところでやっていきたいと思えます。ハードワーク：1人1人がとにかく全力で物事を成し遂げることで、ヘッドワーク：考動ということ、しっかり自分の頭で考えて行動できるようにすること、チームワーク：皆さんの仕事もそうですし、バレーやチーム競技もそうですが、1人でできないということ。また、バスケットボールでもチームケミストリーという言葉が使われていたと思いますが、それと同じであり、コートに入った6人が足されることで、6より大きな数字になり大きな力を生み出すこと。この3つが回ってけば個人・チームが自立・自律できるようになるのではないかとということです。

これが昨日もお話ししたイメージ図でございます。とにかく、大きな木・きれいな花が咲くように、我々の携わる人々、見えない部分でありますけれども、しっかりと根を張っていくことで大きな木・花(選手)・枝(監督)を支えていくということ。あとは、いろいろなファンの皆さんの応援をいただきながら取り組んで行くということ。そして、スポンサーの皆さん、提供をしてくださる皆さんを水に例えて、皆でバレーボール界を盛り上げていこうということです。

そして、当たり前のことを当たり前にといいたいと思えます。これを全体の基本として取り組んでいきます。最後に、心技体知。これは一つずつのものではなくて、すべて合わせて一つののだということで、男女の強化に使っていききたいと思っております。

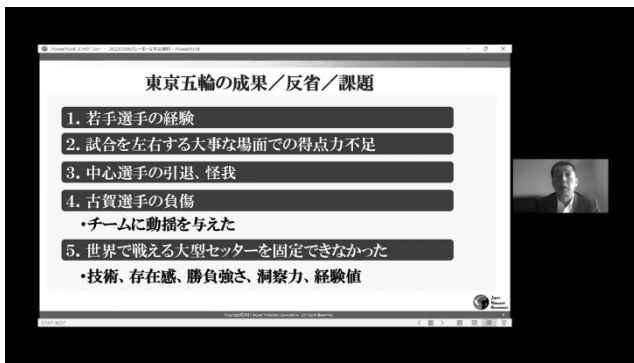
< 講演④ 中村 貴司 氏

(日本バレーボール協会 女子強化委員長) >

本日は、東京五輪の取り組みに対しての強化方針と成果等のお話をさせていただいて、2番目に現在の女子バレー界の位置づけ、3つ目に今後パリに向けた強化方針、スケジュール等をお話させていただきたいという風に思っておりますので、よろしくお願いたします。

東京五輪への取り組みとしていくつかございまして、チームの方向性ということで、中田ジャパンが東京オリンピックを目指して行ったものとなります。まず、外国人コーチ招聘によって日本人のスタッフだけではなく、違う角度で色々な戦術を含めて取り組もうという強化を始めました。日本は世界で戦うためにはどういふバレーをしないといけないか、ということで日本特有のテンポのよいコンビバレーということになります。得点源のある選手がいるわけではありませぬので、チーム力として戦うためには何をしたらいいのか、ということでコンビバレーを中田監督は掲げました。その為には、正確で全く崩れないレセプションアタックということで、相手の強いサーブ等に1回で切り返す、連続失点を無くすということの取り組みを図っております。トータルディフェンスの強化ということで、故障

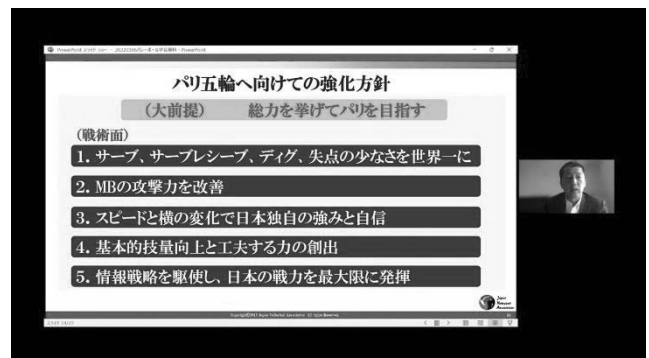
しておりました長岡選手。怪我から復帰して彼女をチームに取り入れて、攻撃パターンを増やすという取り組みをしました。最後に、若手有望選手の戦力化とありますが、2019年にU20の選手達が日本で初めてジュニアの方で世界一を獲得し、その選手達も吸い上げをして東京オリンピックに向けて強化を図ったということがございます。しかし、東京オリンピックの優勝がアメリカ、2位がブラジルということで、日本はA組のPOOLに入りまして、残念ながらベスト8を逃して第10位という結果になりました。しかし、アンダーカテゴリーで世界チャンピオンになった選手達も3名ほど東京オリンピックを経験することができまして、オリンピックの貴重な舞台を踏むことによって次のパリに向けた貴重な経験をしたと思います。やはり、バレーボールは相手のミスを待っていてもなかなか勝ちきれませんので、得点を取っていかないとはいけません。しかしながら、得点不足に泣いたというのが東京オリンピックの反省ではないかと思えます。さらには、東京オリンピックが一年延期ということで、中田監督が思い描いていた選手達が引退なり怪我という、リスクを見据えながらチームを作らなければならないということで大幅にこの辺が崩れてしまいました。さらには、東京オリンピックの大事なところで古賀選手が怪我をし、中心選手だったのでチームに大きな動揺を与えたというものがありました。中田監督はやはりご自身がセッターということがありまして、大型セッターを起用したいという構想があったと思いますが、やはりなかなか大型セッターのみならずセッターがなかなか固定できなかったことが最後の最後までチーム創りに影響したのではという風に思えます。



現在の女子バレー界の位置づけということで紹介したいと思えます。現在女子バレーは世界ランク9位でございます。これからは年間でランキングが決まるのではなく1試合ごとの勝敗によってランキングが左右されるということで、1試合1試合が大事な試合になってきます。現在9位ではございますけれども、パリに向けて少しでも順位を上げていきたい、というような方針でございます。同じアジア圏で中国が3位ということになっておりますけれども、やはり中国に追いつけ追い越せという気持ちでアジアのト

ップに君臨できるようなチームを創っていきたいと思えます。他にアジアでは、東京オリンピックで4位になった韓国が14位、タイが19位という風な位置づけとなっております。

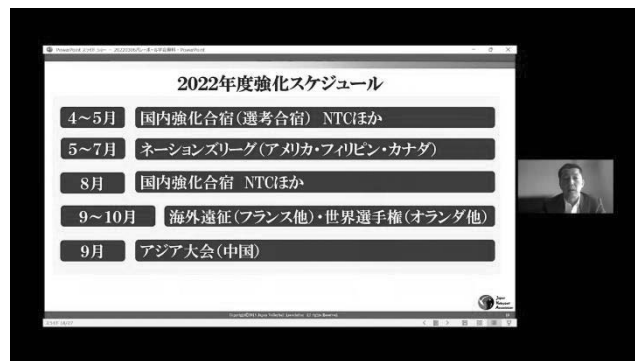
ここからは、パリへ向けた日本代表チームの強化についてお話をしていきたいと思っております。パリ五輪を目指すにおいて基本戦略ということでこの東京五輪という経験を大きく活かさないといけませんし、パリまではわずかな時間しかございません。その短い時間の中で、まずパリを目指すということは当然ながら、パリで終了ということではないので、次のロスに繋げるような強化も図っていきたく思っております。世界ランキングの向上は非常に重要になってきますので、またロスに向けた若い選手たちの積極的な登用も考えていながら、日本女子バレー界の再建を目指していくということが基本的な戦略になっております。大前提でございますけれども、総力を挙げてまずはパリを目指す。その中で具体的に技術面・戦術面ということで、他の諸外国に負けないサーブ、サーブレシーブ、ディグ、失点が少ないチーム、この部分に関しては世界一を目指す。やはりミドルブロッカーの攻撃力の改善というのが非常に重要になってくると思えます。東京オリンピックもさることながら、日本のミドルブロッカーの決定力が非常に少ないので、その辺の攻撃力のバリエーションも含めて改善していくことが重要なという風に思っております。スピードと横の変化で日本しかできない強みとさらなる自信を身に付けるということでございます。あとは、技術的な向上というのは、なかなか次の戦術戦略という部分に関しては現在のバレーボールは確立されていると思えますが、新たな創意工夫、そういったものはパリへ向けても重要になってくるということで、データだけではなく考える力を持っていろいろな工夫をしていきたいと思っております。やはり、日本は情報戦略が非常に長けていると思えますので、そういうものも一緒に組み込みながら日本の戦力を最大限に発揮できるようにしていきたいという風に思っております。



チーム作りとしては、やはり核となる選手、攻撃の軸とチームの柱となる選手を早く見つけ出し、パリまで時間は

ありませんのでチームを早く作り上げていきたいと思いません。さらにはパリのみならず、次の五輪に繋がられるような新戦力の積極的登用をして、活性化を図り下から今の選手たちを突き上げる力を早く発掘して、そういう良いサイクルになるようなかたちに持っていききたいと思います。日本の選手はメンタルという部分では弱いところもあると思いますので、自分たちが「よしメダルを取ろう」という強い気持ちを持って取り組むような人間的なものも形成していきたいという風に思います。目標に向かって現在進めておりますけれども、その中には海外とのネットワーク、これも非常に重要になっておりまして、最近では海外のUカテゴリーも含めてなかなか国際経験を積むことができていないので、ネットワークを広げて情報交換を含めた海外との交流や試合をしていきたいと思っております。さらには指導者の育成は今後のバレー界にとって大きな課題となるので、そういった指導者の育成も選手の育成とともにやっていきたいという風に思っております。そして、世界大会の1試合1試合がランキングに影響していきます。これはオリンピック出場に向けて重要なものでもありますので、現在日本はランキング9位でございますけれども、少しでもランキングを上上げて優位に出したい。その為には上位のチームにももちろん勝たなければならないですが、ランキングが下位のチームに取りこぼしはできないということになります。世界も日本のバレーはしつこく粘って繋ぐバレーが心情だと思いますので、その中でもそれ以上に、世界が嫌がるような日本特有のバレーを確立することが重要になってくると思います。そして、人間力を高めることと平行してバレーでも価値を高めることができると思うので、そういったこともバレー界の発展に繋がると思います。今後の主要大会で、2022年度はネーションズリーグ、AVCカップ、アジア競技大会、世界選手権があります。2023年度にはネーションズリーグが同じようにございまして、ワールドカップに位置付けされる世界最終予選が8月9日に行われます。まだ正式に決まっている訳ではないので、ここでパリオリンピック出場権を獲得できるようにやっていきたいと思っております。2022年度の強化スケジュールとして、4月からVリーグが開催されておりますので、国内のリーグが終わった4月5月は国内の強化合宿、これは数名の候補選手で行われますので選考合宿という位置付けもございまして。そして5月から7月にネーションズリーグがアメリカ、フィリピン、カナダで行われます。帰国後国内で合宿をして9月10月に海外遠征等をして世界選手権に向かいます。これに並行して9月にアジア大会がございまして、2チームを創って2022年度の国際大会に挑むということになってきます。先程ロードマップということで男子女子ということがございましたけれども、東京オリンピックでは10位という結果でしたが、選手達もこの悔しさをばねにして2022年度の世界選手権、次のパリオリンピックで何とか

ベスト4以上、あわよくばメダル獲得をする。そして次の世界選手権、ロスオリンピックに向けてメダル獲得を目指した中長期的な目標を掲げて日本女子バレーの強化にあたっていきたくて思っております。



これはネーションズリーグの今発表されているPOOLのリストとなります。この中で参加は16チームで日本は第1週がアメリカで、ドミニカ、ドイツ、韓国、アメリカと対戦、第2週のフィリピンがロシア、ポーランド、タイ、中国と対戦、第3週がカナダでセルビア、ベルギー、オランダ、トルコと対戦をいたします。この中では上位チームと多く対戦しますので、少しでも多くの勝ちを取ることでランキングを上げたいということを狙っております。

最後になりますが、もちろん我々も日本の強化に対して尽力を注いでいくのですが、やはり関係している皆さんのお力をいただきながらパリの出場権の獲得をできるようにしたいという風に思いますので、是非ともいろいろな形で女子バレー男子バレー含めてバレーボールにご協力いただきたいと思っておりますので、今後ともご支援ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

<ディスカッション>

松：共通の質問を取り上げてお聞きしていきたいと思いません。今回は、市村先生がアナリストという立場、恩塚先生が女子バスケットボール監督という立場、矢島先生は全体の強化本部長、中村先生は女子の強化委員長という立場で、それぞれお立場が違うということで、少し議論がうまくいかないこともあるかと思いますが、お立場を活かしてお話ししていただきたいと思いません。

ハンドボール、バスケットボールは直接の接触があるのがバレーボールとの違いであると思っております。一方で、同じことは得点を取る、得点を失わないということですが、その中でキーワードは、市村先生にも示していただいた「体格差」ということであると思いません。女子の競技の場合には、中東が宗教の関係でスポーツをやらないということもありまして、東アジア地区のチームが出てくる、男子は中

東中心なのでアジアを抜けるのが難しくなってきます。これの一つは体格差ととらえられると思いますが、これを補う施策やプロジェクトはありますか。

市：ハンドボールは体格差の問題があります。特にディフェンス、守備の部分で顕著になります。大きくなることはできないということです、現在女子代表チームは守り方の再考をしています。どこまでプレーさせてどこであきらめるのか、今まで4、5点取られていたものを何とか2、3点に抑えられるように考えております、食事やトレーニングは最大限にやっていますので、次の部分で考えなければならぬと、分析の視点からも考えております。

恩：差し引かないということが大事です。苦手意識を持たないところが入り口としてすごく大切だなということでコーチングしております。大きいということは一つの特徴に過ぎません。それがどれだけ自分たちに影響するのかを考えよう、そしてその影響に対して自分たちの強みをどう発揮していくかで勝負していこうと考えています。その体格が大きいということがどのような要素で成り立っているのかを自身で構造化して考えられることと、自分自身が持っている武器は何で、その武器が自チームや対戦チームとの関係の中で、どのような価値があるのかを整理していくことが大切だと考えています。これを学ばせ、考えさせる場面を作るようにしています。

矢：バレーに関しても、身長の高いことは一つの特徴であると認識しております。ないものねだりしても仕方ないところですので、技術や体力で補うという発想で強化を続けています。大きくて技術のある選手がいるには過ぎないので、男女共に発掘をしています。しかしながら、特徴を生かしながら強化をしていくことが大切だと考えます。

中：バレーボールは、当然ながら身長が高くパワーがあった方が優位だと思います。ネットを挟んでいる競技なのでチームプレーが大事です。しかし、サーブは個人の技術であるので、世界に負けないサーブ力を身に着けることでゲームを優位に展開できるのではないかと考えています。やはり体格は世界諸外国とは違いますが、日本特有で持っていることは細かい技術力やレシーブ力。それを活かしながら世界にどのように立ち向かっていくかを突き詰めていくことが大事だと考えます。

松：男子ではアジアを抜けること、女子では世界でさらに上位を狙うというところで、改革がキーワードであります。ハンドボールの男子はミックスが多いことや、バスケットボールは帰化のプロジェクトがあるとか、選手層のミックスやハーフ、国籍変更があります。プロジェクトとして来るものではなく、こちらから発信して選手の獲得をする、ピュアブラッドだけではなくて色々な選手を獲得するというような、体格差を補うプロジェクトが何かあれば、バレーボールにも必要だと思いますので、ハンドボールやバスケットボールから教えていただきたいです。

市：現段階で帰化選手を呼ぶことや、ミックスの選手を意図的に入れる取り組みはありません。しかし、海外で日本国籍を有している人を探し続けています。女子キーパーの亀谷さくら選手はノルウェーで育ちましたが、日本国籍を取れる状況の選手でしたのでオリンピック前に獲ってもらいました。男子でも、スイスに住んでいる選手をアンダーの時から代表チームに呼んで、トレセンにも定期的に呼んでトレーニングをして、最後日本を選んでほしいと言いました。このように、海外のクラブにいて、日本国籍を取れる選手を探しています。

恩：バスケットボール界はオリンピックに出ている選手は男子3名が帰化をしました。女子は、ハーフの選手は積極的にバスケットをするように導いています。実際、オリンピックでも3名ほどのハーフの選手が活動していました。国籍がない選手でも15歳以下までに帰化をすることで、帰化選手枠ではなく日本選手枠として活動できるので、15歳以下で帰化をできるようにして、2名の選手が代表チームに入っているという事例もあります。そのような年齢的なところも考えています。

松：年間に何人という数字があったと思うのですがどうですか。

恩：分からないです。ハーフの選手が何人いるかというのはまとめているとは思いません。ちなみに、女子は、東京五輪では帰化選手を入れているチームが半分以上いて、それが主流になっています。ヨーロッパのチームはよく帰化選手を入れています。

矢：JVAとして、プロジェクトとしてはありません。高校・大学・Vのチームでは、自然発生的にハーフの有望な選手が多くなっています。ですので、各チームとコミュニケーションを取り、有望な選手で日本に帰化して活躍したい選手についてはいち早くそのようなことをしていきたいと思っております。JVAとして、これらのことをプロジェクト化するかということは検討するかということにも至っていないので、今日のことをきっかけにいろいろ検討してみたいと思います。

中：パリまでは時間がないので、帰化を進めてもなかなか思うようにいかないというのが現実的だと考えます。しかしながら、現在日本でプレーしている外国籍の選手については、できればパリ、その次のロスに向けて、帰化選手を積極的に登用していきたいと思っています。しかし、帰化というのは選手にとっても大きなことであるので、日本のバレーの魅力や伝えられるような活動をしていかなければならないと感じています。男子は海外挑戦している選手がいますが、残念ながら女子は今少ない状況です。今後は世界の舞台での活躍、海外挑戦を推奨し、海外で揉まれて日本で代表として活躍するというイメージを持っていきたいと思っています。本人たちがチャレンジするにあたっていろいろな課題が出てくるとは思いますが、男子が世界に挑戦して

レベルが上がっていることが事実としてありますので、女子も若い選手にどんどん世界で挑戦してもらいたいと個人的に思っています。

松：次に、会場の皆さんからの質問を取り上げます。

指導者の育成に関して、どのような取り組みをしているのか。ご自身の立場で分かることがあればお話しいただきたいと思います。

市：私の立場では難しいところではありますが、J スポのコーチを通して育成をしているというのが現状だと思います。

恩：1つは、バスケットボール協会として、指導者養成部会がライセンスを取るために研修を行っています。私は代表コーチとして、指導者が学ぶ環境を作っていきたいと思っています。大きなポイントとして、どんなことを考えてコーチをしているのかということです。指導者の仕事は何かと言ったときに、頑張らせる・鍛えるという価値観がバスケにはあります。しかし、そうではなくて、選手がいかに輝くかという視点で、頑張らせるのではなくて、頑張りがたくなるようにさせる。このような問いをコーチ自身が持ち、問いかけてやっていくことで、選手自身がワクワクして勝手にやりたい自分に向かって活動するのではないかと考えています。やれと言われれば、言われたことを言われたときにしかできなくなります。例えば、海外旅行に行くとかワクワクすることがあれば、行く前からそのことを考えていて、どのようにしていこうかなと考えたりしますよね。そのように、なりたい自分を設定して、イメージして、そこに行きたいなとその気にさせるということをコーチの問いとして掲げていきたいです。バスケットボール界はそのようなコーチングで選手を導ける世界にしていきたいと思っています。

矢：バレーボール協会でも指導者養成委員会があります。ブラン監督は世界的なコーチであるので、そういった方に学会で話をさせていただき、指導者の方に聞いてもらうこと、それだけでも指導者養成になると考えます。これからそういった機会を作っていきたいと思っています。そして、指導には絶対にこれが合っているというものはないと思うので、その人・そのチーム・その状況によってやり方は変わります。私もクラブチームの経験はありますが、私がやってきたことは言えますけれど、その時にたまたま結果が出ても、違う時にできないかもしれない。喜怒哀楽という感情持つ人間を相手にするので、指導者育成として大きなところでの講習も大事ではありますが、個人個人の指導者もいろいろなところから知識を吸収したり人の話を聞いたりすることは大切であります。自分から踏み出してやるのが個人的には大切だと思いますが、JVA でもより体系的なレベルの高い指導をするための施策は必要なのかなと思っています。

中：指導者というのはいろいろな指導の形があります。トップにのし上がる選手も伸び悩む選手もいます。その中で、指導者は技術力も高めることはそうですが、人間力も高め

なければいけません。バレーの価値が上がるような指導をしていけるような方々の育成が大切だと思います。選手が海外挑戦を積んで強化を図るといったものがありますが、バレーボールの指導者は国内でとどまっており、海外に行つて経験する人が少ないと感じております。ジュニア、ユースを含め、アンダーカテゴリーの国際大会もあるので、多くの方に世界を経験してもらいたいです。世界を見ることで、自分の指導という枠を超えたものが出てくると思います。バレーボールの一貫指導というものの中で、アンダーカテゴリーからシニアまでやっていかなければなりません。その前提となる、骨格となる指導が、将来的に世界と戦うために必要なのだと考えております。そして、一貫性を持った何かを持って行かないと、指導をする側もどのような観点でやっていくかが見えてこないと思いますので、バレーボール界として、どのようなものが世界につながるのかを共通認識を持つことが重要です。そのような形で、シニアの活動も含めていろいろな方にオープンにして、様々な角度から指導とはどのようなものかを考えていかなければならないと思います。

市：補足です。指導者育成とは違うかもしれませんが、サイドラインというソフトウェアで、ある程度限定された人たちに映像や代表チームの様子を共有しているのが今の状況です。最近では、ダグル・シングルソン監督のゲームモデルを作ってそれを発表しようということで作成しております。

松：もう一つ会場からの質問があります。バレーは20年以上前からブロックが課題であります。ハンドボールやバスケットボールでは技術的な課題をどのように克服しているのかを教えていただいて、バレーボールに落とし込みたいと思います。

市：特定の技術は思い浮かびませんが、レフリーのレフリングが国際連盟はどんどんクリーンになっていてバスケットボールに近づいて行っているイメージです。2分間退場という特有の罰則がありまして、危険なプレーをすると2分間の退場になるのですが、それはチームにとって大きな損失であるので、そうならないようにどのように守るのか。選手の技術とレフリングを常に一致させていくというところを一番にやっております。

恩：シュートについて、1つ目はゴール下のシュートです。小さい選手は大きい選手にブロックされてしまうことを気にしてシュートを決められないということを、今課題解決しようとしています。まずは、大きい選手が来たら大変だということを思い込むとできない理由を探し出すので、そこをクリアにすることです。この時はこうというような、スキルの選択・シュートを選択するための選択肢を3パターンほど設定しております。代表活動を半年間やってきたのですが、今年2月の試合では結果が出ませんでした。そこで、新たな課題として思っていることはプレーの文脈化

です。それまでの流れの中で誰がどこにいるのかというコート図を含め、試合の全体像の中でのスキルを、文脈をしっかりとイメージしながらプレーすることで、選択的に余裕を持ってプレーができるのではないかと考えます。技術だけを特化してやってもゲームの中では発揮されないと考えています。

2つ目に3ポイントの練習をよくするのですが、今までは、試合っぽくと言いながらもその場で打ったり、少し動いて打ったりする程度でしたが。しかし、シュートがぶれる原因は、ボールを操作するハンドリング技術と、ディフェンスによってリズムを崩されることの2つであり、この2つの要因が試合でパフォーマンスに影響があります。この2つが乱れるような設定でのシューティングドリルを設定してシューティングをすることで、乱れに強いスキルの発揮・方法を今トレーニングしています。これは半年間で少しだけ成果があると思います。スキルだけに特化してもなかなかゲームのパフォーマンスには一定のところまでしか行かないのではないかとこの風を感じています。

松：ハンドボールは東京オリンピックにて男女ともフランスが優勝しています。バスケットボールは男女ともアメリカが優勝しています。男子は2位にフランスがいて、女子は2位に日本で3位にフランス。ハンドボール・バスケットボールともフランスが上位にいるわけですね。バレーでも、男子ではフランスが優勝。女子はアメリカが優勝ということで、フランスやアメリカが上位にいます。フランス・アメリカはハンドボール・バスケットボール・バレーボールでメダルを取っていることになります。何かこの辺り、共通点や強さがあるのでしょうか。フランスの強さ、アメリカの強さの情報はお待ちですか。

市：ハンドボールはヨーロッパが中心のスポーツであります。その中でも、プロリーグが、ドイツリーグ・フランスリーグ・スペインリーグが3大リーグで、デンマークを含めると4大リーグになります。実は、フランスはリーグ自体それほど強くなく、一つ二つのチームが飛びぬけて強いだけであり、ドイツのレベルが一番高いのです。しかし、フランスにはハンドボール専用のセンターがあり、施設等含め組織力が高いと感じています。

恩：フランスはアメリカのようなタレントを擁しています。白人の器用な選手と黒人の身体能力の高い選手。この割合が、アメリカ代表とほぼ変わらないというところがポイントだと思います。他のヨーロッパのチームは黒人の選手が一人二人しかいないというところが大きいかなと思います。あとは、クラブの育成環境が素晴らしいということと、クラブからすぐにアメリカに留学ができたり、NBAとかWNBAでプレーをして北欧に帰ってきたりというパイプがしっかり出来上がっているというところも強さの要因だと考えます。

松：登壇者の皆様から、最後に付け加えや話し損ねたことがあればお話しください。

矢：これからパリオリンピックに向けて強化をしていくわけですが、パリのバレーボール協会とも連携していて、男子はフランスが優勝しているの、タイアップしながらいろいろなことを探りながら、どんなことをやってきたかということも聞いて、日本の成長につなげていきたいと思っております。男女ともオリンピック出場が決まった暁には、向こうでよい形で望めるように現在進めているところであります。

また、このような形で市村さん、恩塚さんと話をすることができましたが、これを機会に、引き続きいろいろなことを意見交換しながら、チーム球技全体がいい結果を出せるように取り組んで行けたらよいと思います。

